

戦国時代の太宰府と山城

立命館大学文学部准教授 岡寺 良

【講演要旨】

戦国時代後期、九州北部の勢力図は目まぐるしく入れ替わる。鎌倉時代以来の名族・少弐氏から中国地方の覇者・大内氏へ覇権が移ったものの、大宰大弐となった大内義隆も、天文 20 年に家臣・陶晴賢によって自害へ追い込まれ、九州北部の地は、豊後の大友氏と、大内氏の後に中国地方を席卷した毛利氏との争奪の場、いわゆる「豊筑争奪戦」が永禄年間には繰り広げられることとなった。

その永禄期の豊筑争奪戦に打ち勝った大友氏が九州北部を制圧したものの、天正6年に高城・耳川合戦での島津方に対する大敗北を契機に、秋月氏や筑紫氏などの豊筑の国衆たちは毛利氏、島津氏、龍造寺氏などと手を結びつつ、大友氏からの自立をはかろうとする群雄割拠の時代へと突入した。龍造寺隆信の死後、島津氏と大友氏により、九州の覇権は争われるが、最終的に大友氏が来援を要請した豊臣秀吉によって、九州は平定され、九州の戦国の世は終わりを告げる。

一方、戦国時代の太宰府も、少弐氏没落後は、大内氏、大友氏が関与するところとなり、宝満城、岩屋城などの九州を代表する山城が築かれ、高橋鑑種や高橋鎮種(紹運)などの武将が活躍した。特に天正 14 年に薩摩島津方によって攻められた岩屋城合戦は、後の九州の趨勢を運命づけた戦いとして後世認識され、岩屋城を最後まで守り玉砕した高橋紹運は、「戦国の花」として後の世に大いに顕彰されたのは有名なところである。

本講義では、大内氏滅亡後、永禄期の大友・毛利氏の豊筑争奪戦から、天正期の国衆乱立状態、そして豊臣秀吉による九州平定に至る歴史をたどるとともに、それらの歴史事象に関わった太宰府の山城について、城郭構造と史料の検討からその実態を探る。

さらに近年の成果として、本格的な調査がなされずに半壊状態となっていた太宰府市高尾城の遺構について、三次元立体図化による遺構復元と復元された遺構が示す歴史的意味合い、また、これまでほとんど注目されてこなかった飯塚市米ノ山城跡と、天正 11 年「米ノ山合戦」に焦点を当て、これまで忠義に篤いともイメージされてきた高橋紹運像が本当なのか？その実像にも迫りたい。

<参考文献>

岡寺良 2019「太宰府市高尾山城跡の構造に関する予察一失われた遺構の類推復元について一」

『太宰府市公文書紀要一年報太宰府学』第 13 号 太宰府市

岡寺良 2020『戦国期北部九州の城郭構造』吉川弘文館

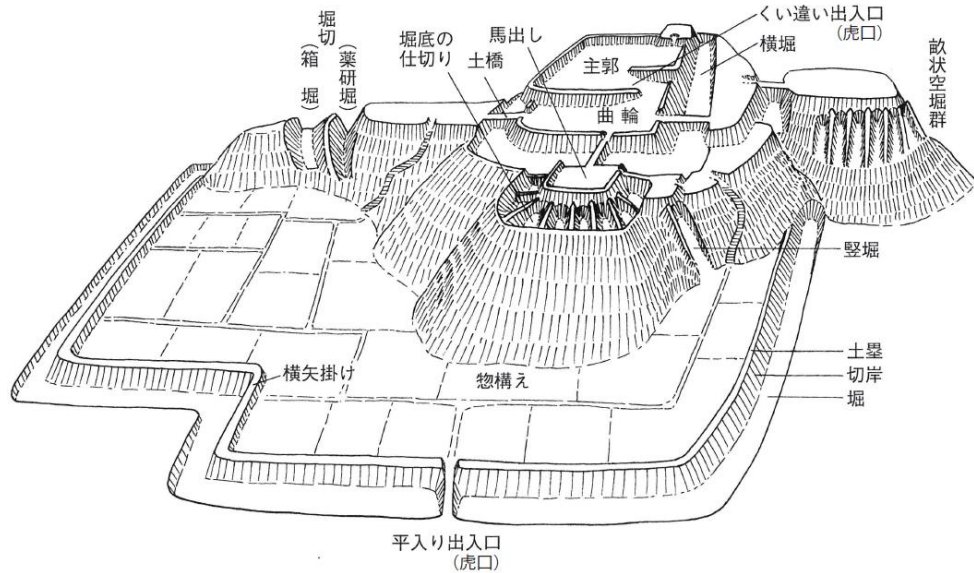
岡寺良 2022『九州戦国城郭史 大名・国衆たちの築城記』吉川弘文館

岡寺良 2024「城郭研究から見た天正 11 年米ノ山合戦」『太宰府市公文書紀要一年報太宰府学』第 18 号 太宰府市

九州歴史資料館編 2017『福岡県の城ー戦国乱世の城から幕藩体制の城へー』

福岡県教育委員会編 2014・2015『福岡県の中近世城館跡』I・IIー筑前地域編

はじめに 戦国時代の山城とは??

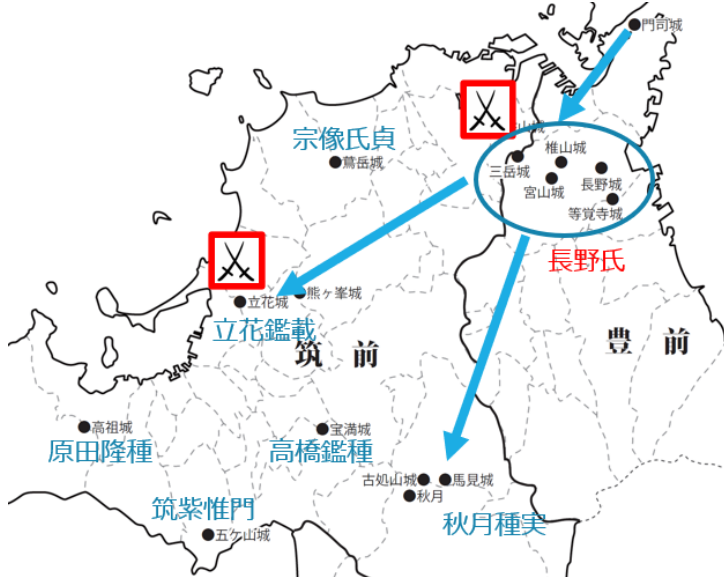


城の各部名称

1. 戦国時代の大宰府

(1) 永禄期豊筑争奪戦とその後 毛利・大友

永禄 11~12 年 (1568-69) に毛利勢の豊筑大攻勢→筑前の高橋鑑種 (岩屋城督) ・立花鑑載 (立花城督) の毛利方への寝返り
 立花城での大決戦中に毛利の撤退 (尼子残党の蜂起←大友の差し金)
 北部九州は大友氏の安定的な支配下へ



永禄 11~12 年の毛利軍の進路と呼応した国衆・城郭

天正9年(1581):織田信長の仲裁による「豊薩和平」→全面对決の回避
→しかし、本国以外での大友と島津との勢力争いは続く
天正12年(1584):肥前沖田礮で島津勢が龍造寺隆信を討ち取る
→龍造寺を島津の支配下に置き、肥後へ進出
天正13年(1585):島津の肥後平定→筑後国衆からの要請による筑後進出
※筑後をめぐる「豊薩和平」の完全な破綻

(3) 天正の九州頂上決戦とその後 島津・大友・豊臣

天正13年10月2日付で関白豊臣秀吉から九州の諸大名に惣無事令発出。
豊臣政権は毛利を完全に支配下に置き、四国も平定、次は九州という情勢。
大友・島津、それぞれ使者を派遣
天正14年5月:国分け案の提示

<国分け案>

大友氏…豊後、肥後半国、豊前半国、筑後国

毛利輝元…肥前国

筑前国…秀吉直轄(朝鮮への足掛かり)

島津…肥後半国と薩隅日三ヶ国

島津には到底受け入れられない内容→島津と豊臣・大友の対立は決定的

天正14年(1586):島津軍の肥前・筑前進出

→秋月氏の手引きにより、筑前の大友方の撃滅が目的

筑紫広門(肥前勝尾城)・高橋鎮種(岩屋城)・立花統虎(立花城)

→筑紫・高橋は破るも、立花城を攻め落とす前に、島津は撤退、豊後本国を直接叩

く作戦に変更。「筑前西部は大友方の勢力として残る」

天正14年8月:立花城籠城戦→8/25・島津勢の筑前からの撤退

9月:9/18・豊臣先遣隊(四国勢)豊後入国

10月:島津勢・豊後討ち入り

10/4:豊臣先遣隊(毛利(吉川・小早川)・黒田)豊前入国

→企救・京都・築城郡一帯を平定

12月:12/12:戸次川の戦い→四国勢、島津勢に大敗北

12/末:毛利・黒田勢力、田川郡香春岳城を攻め落とす

天正15年3月:島津勢、豊後から撤退→大友勢を完全に打ち負かせず

3/28:秀吉本隊、九州上陸

4月:4/1・田川郡岩石城の落城

4/2~3:秋月氏の降伏

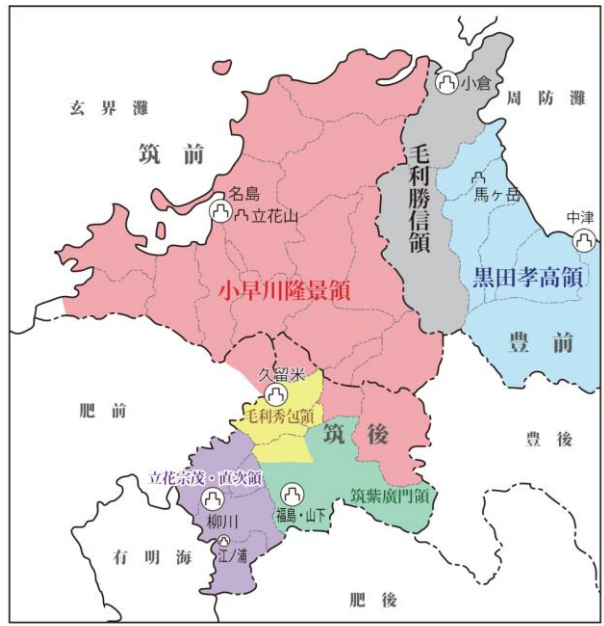
4/17:日向根白坂の合戦→豊臣勢、島津を破る

5月:5/3・島津義久降伏、5/22島津義弘降伏、

5/26・新納忠元降伏→九州平定の完了

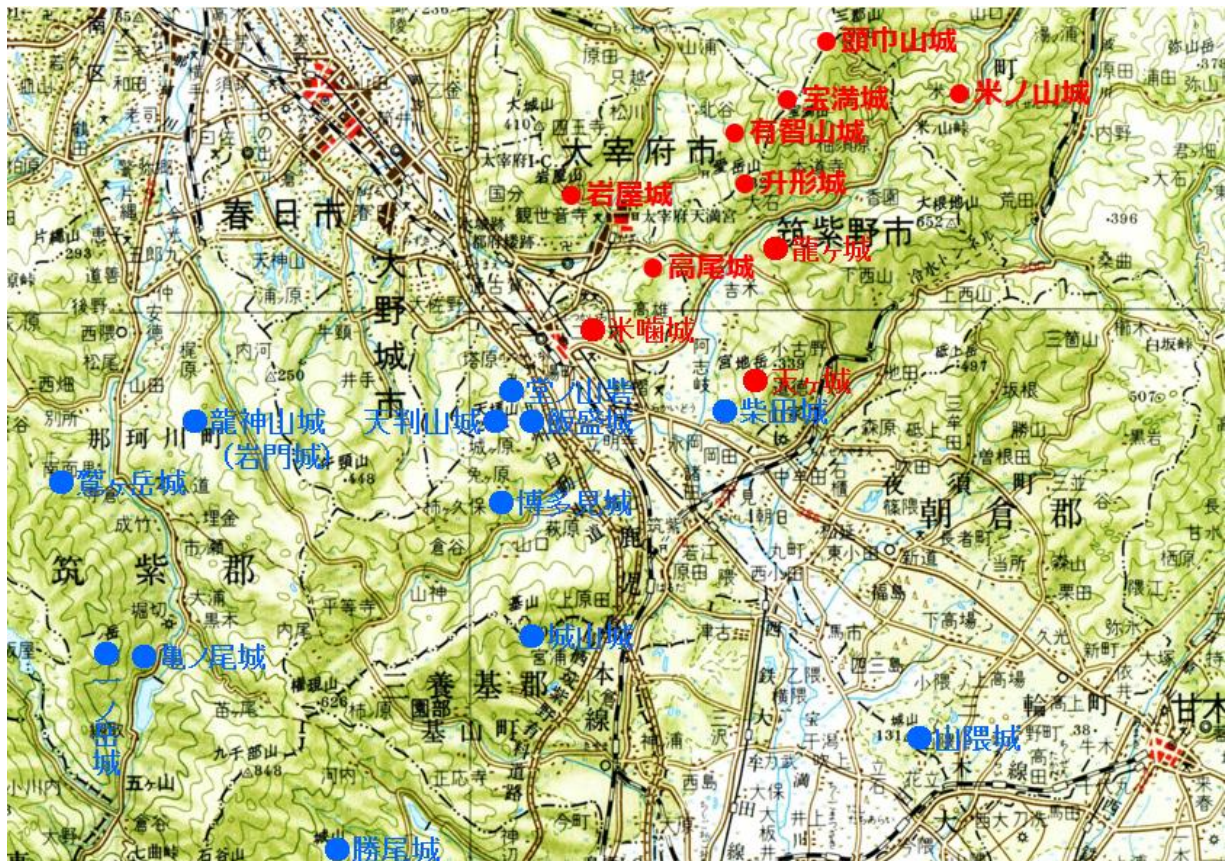


1587年以前の勢力図



1587～1600年の福岡県内の領主配置

2. 太宰府の山城 高橋紹運はどんな城で戦ったのか？



太宰府および周辺戦国城郭位置図（赤が高橋方の城）

(1)岩屋城合戦に至る事跡

<大内氏支配時代の岩屋城>

- ・文明 10 年(1478)10 月 18 日：大内政弘、深野重親/山道兼久に夜須郡山家庄/那珂郡矢方原を充て行い、**岩屋**に在城せしむ（正任記）
- ・文明 12 年(1480)2 月 9 日：大内政弘、讃井護重に筑前国御笠郡府領内の地を充て行い、**岩屋城**を守備させる（讃井文書・市史中世資料 P723）
→文明 10 年 8 月、大内政弘が豊前・筑前を少貳氏から奪回
※岩屋城は、大内氏の御笠郡支配の城として文献に登場（この頃築城か？）
- ・天文 4 年(1535)：平戸の籠手田定経、飯田興秀から**岩屋城**で故実の伝授を受ける（聞書秘説・市史中世資料編 P779）
→飯田興秀は、御笠郡代で岩屋城を預かる城督を兼ねる。大内氏による支配。
- ・天文 12 年(1543)9 月 6 日：少貳冬尚残党「**岩屋城麓**」にて蜂起するも鎮圧（松隈家文書）

<大友・毛利の豊筑争奪期の岩屋城>

- ・天文 20 年(1551)：大内義隆殺害、大内氏滅亡
→このあと、岩屋城を初めとする御笠郡一帯は、大友氏の手にならぬ
- ・弘治 3 年(1557)：大友義鎮、大宰府の有智山、小谷、中堂、原に検地（筑前国続風土記）
- ・永禄 2 年(1559)4 月 10 日：大友義鎮、高橋鑑種を筑前国**宝満・岩屋**両城督となす
（城督+二千余町の領地+筑前 15 郡の執権）
- ・永禄 5 年(1562)ころから、高橋鑑種、毛利氏に通じ始め、大友氏に反目
- ・永禄 7 年(1564)：幕府の仲介により高橋鑑種は大友方に戻る（背後で毛利とつながる）
- ・永禄 10 年 7 月~12 年：筑前の国衆が大友に挙兵し、毛利・大友の豊筑争奪戦となる
この時には**岩屋城**よりも**宝満城**の記載が頻出
高橋鑑種も宝満城に籠城

<豊筑争奪戦後の岩屋城>

- ・永禄 12 年、毛利氏の九州撤退後、高橋鑑種は大友義鎮に降伏、豊前小倉に移される。
- ・元亀元年(1570)：吉弘鑑理の次男・鎮種に高橋家を継がせ、**宝満・岩屋城**督とし、戸次鑑連（道雪）を立花城に入れる。
- ・天正 6 年(1578)11 月 12 日：高城・耳川合戦で大友勢、島津勢に大敗北
- ・耳川敗戦直後：龍造寺隆信、筑前の国衆たちと筑前の大友支配地域に攻め入る。
- ・天正 7 年正月 18 日：筑紫広門・秋月種実、**岩屋城**を攻めるも敗れる
3 月：秋月種実と高橋紹運、石栗嶺（石坂峠）で戦い、秋月方敗走
9 月 6 日：秋月種実、**宝満城**を攻める。秋月方敗走
- ・天正 8 年 3 月：秋月種実、筑紫広門、**宝満城**に高橋紹運を攻める。
8 月 15 日：高橋紹運家臣・北原鎮久（筑紫野市龍ヶ城）、秋月に通じたため
誅殺。宝満山麓にて秋月勢と高橋勢が戦う

<岩屋城合戦に向けて>

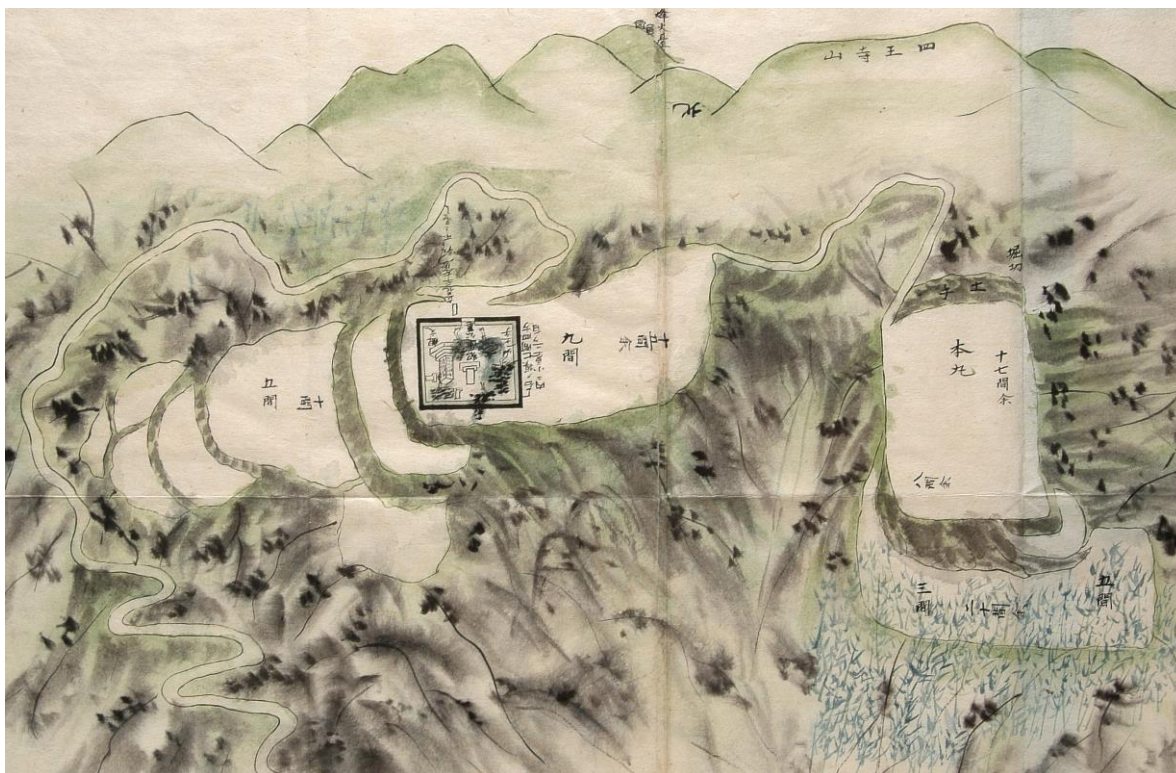
- ・天正 9 年 7 月 27 日：筑紫広門、大宰府に出陣し、高橋紹運・戸次道雪が討つ。
8 月 18 日：戸次道雪、高橋紹運の長男・千熊丸（立花宗茂）を養子にする
11 月 6 日：戸次道雪・高橋紹運、秋月領嘉麻郡・穂波郡を攻撃

- ・天正 11 年 2 月 8 日：筑紫広門、岩屋城を焼亡させる。
 - 3 月 1 日：筑紫広門、大宰府に出陣、高橋紹運・戸次道雪が討つ
 - 4 月 6 日：戸次道雪・統虎、原田方の那珂郡片辺野の砦を攻略
 - 4 月 23 日：戸次道雪・統虎、宗像氏貞の許斐城を攻略
 - 10 月 3 日：秋月種実、高橋方の米ノ山城を攻略（米ノ山合戦・後述）
- ・天正 12 年 3 月 12 日：戸次道雪・高橋紹運、筑紫広門と御笠郡武蔵で合戦
 - 3 月 24 日：龍造寺隆信、沖田暉にて敗死。
 - 6 月頃～：戸次道雪・高橋紹運、大友方の筑後攻略に加わる
- ・天正 13 年 9 月 11 日：戸次道雪、御井郡北野にて陣没する。
 - 9 月 13 日：筑紫広門、宝満城を襲撃。高橋紹運、高良山から岩屋城へ戻る
 - 10 月 2 日：秀吉による九州惣無事令
- ・天正 14 年 5 月頃：秀吉による九州国分け案の提示→豊臣・島津の破綻決定的に
 - 7 月以前：筑紫広門、大友・豊臣方に付く（娘を高橋統増に嫁がせるとも）

<岩屋城合戦>

- ・天正 14 年 7 月 6～10 日：薩摩島津勢、筑紫広門の肥前勝尾城を攻略
 - 7 月 14 日：薩摩島津勢、宰府表に着陣
 - 7 月 24 日：日向勢（上井覚兼ら）、大宰府に着陣
 - 7 月 25 日：高橋方の密書により、豊臣方来援近しの方が島津方に知れる
 - 7 月 26 日：薩摩勢、岩屋城下砦を破却。
 - 7 月 27 日：薩摩勢総攻撃、岩屋城落城、高橋紹運自刃。

(2)岩屋城



岩屋城図（個人所蔵資料）

(3)宝満城

■島津勢攻略時の宝満城降伏の日はいつ？

<上井覚兼日記より>

8月5日：宝満・立花は未だ相支えず候。宝満の事は五日とは支え申まじき在所にて候
(まだ降伏・落城していない)

8月8日：宝満も下城の由候(降伏)

<北肥戦誌>

「八月五日、統増宝満を下城し、則ち島津衆へ当城を引渡して・・・」

→『続風土記』では岩屋城落城の翌日とされるが、実際は11日後の8月8日

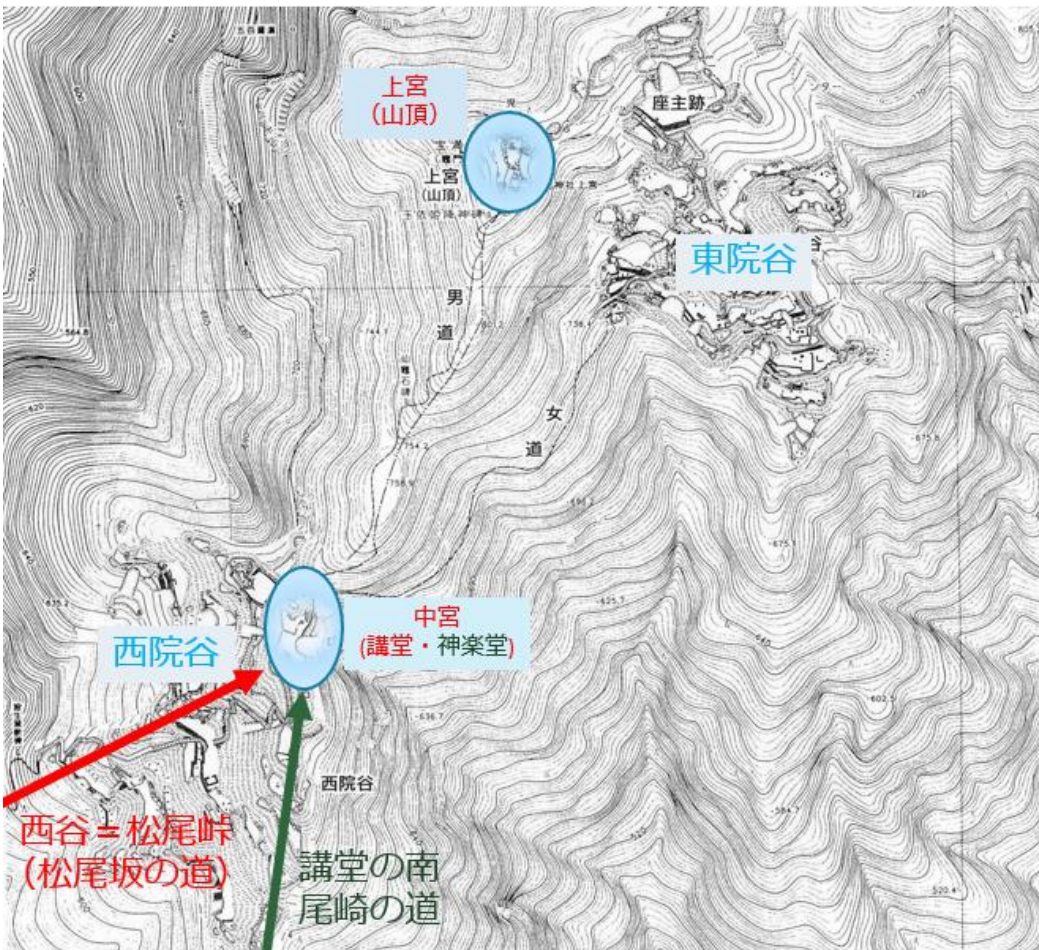
■宝満城の内部の様子の記事

<高橋記>

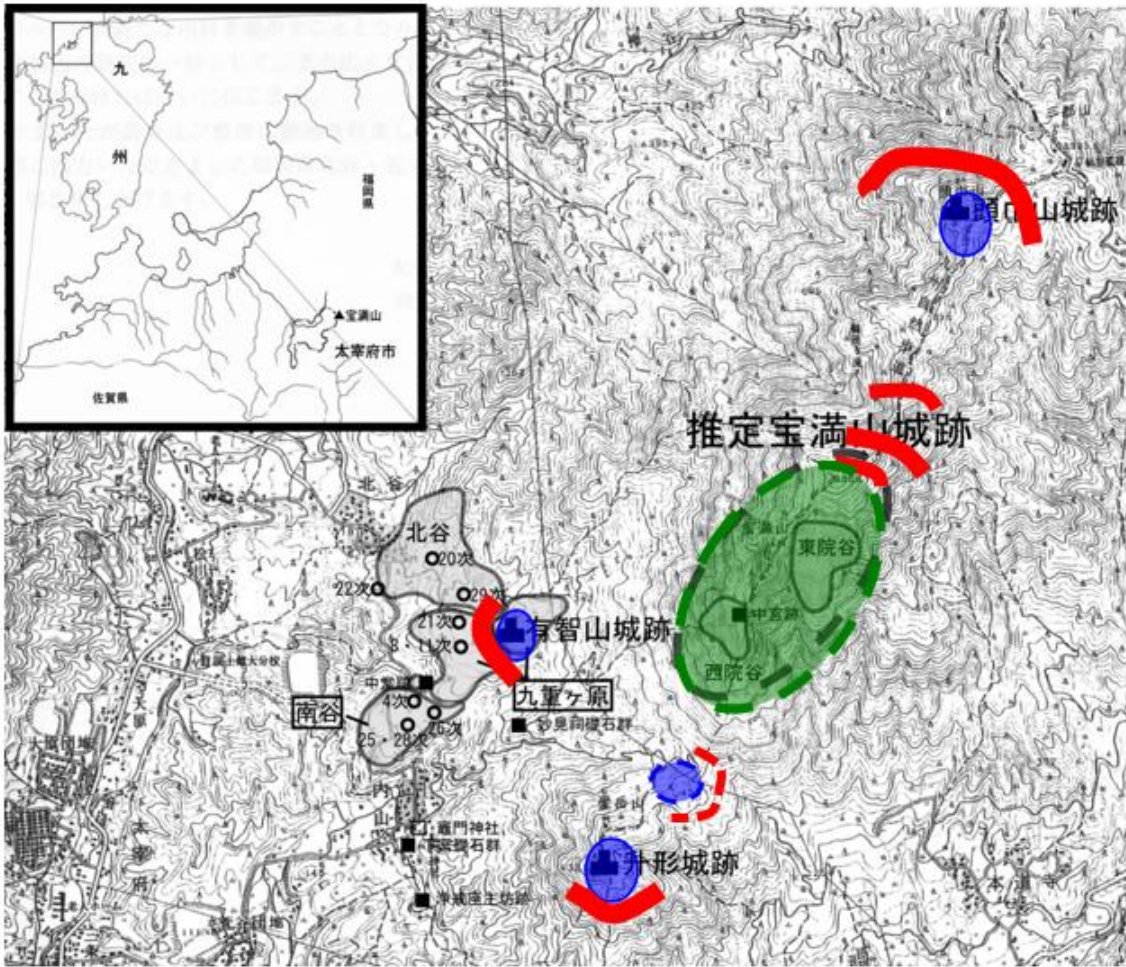
「然れば宝満には**神楽堂**の門を堅め、門番を付け置く候故(中略)外より門を押し開き、一度にどっと押し入れ、**神楽堂**に参り候てみれば・・・」

<筑前国続風土記・岩屋軍記>

「紹運自害せられしかば、翌廿八日早旦より宝満の城下に寄来る(中略)一手は**追手松尾坂**より攻上る、一手**愛嶽の取出**を乗破て、**講堂の南の尾崎**より競上る」



天正14年8月5～8日(続風土記では7/28)の島津勢攻撃のルート(『続風土記』)

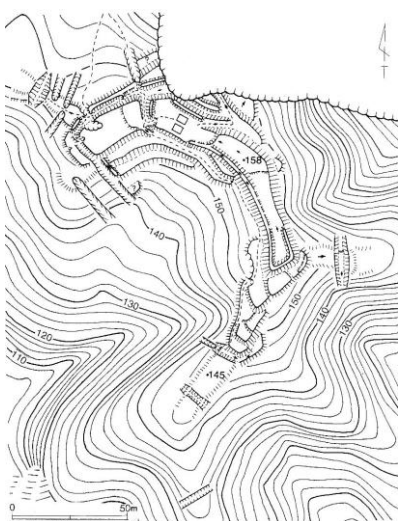


宝満山の防衛想定図

(4)高尾城 失われた遺構の復元

<高尾城に関する記載>

- ① 岩屋城合戦の際の秋月方の陣所（「拾遺」）
- ② 筑紫氏の「高尾ノ城」（「城数之覚」）
- ③ 高橋紹運の家臣の城（「古戦古城図」）



高尾城縄張り図（岡寺作成）



高尾古城図（国立公文書館所蔵）



明治33年

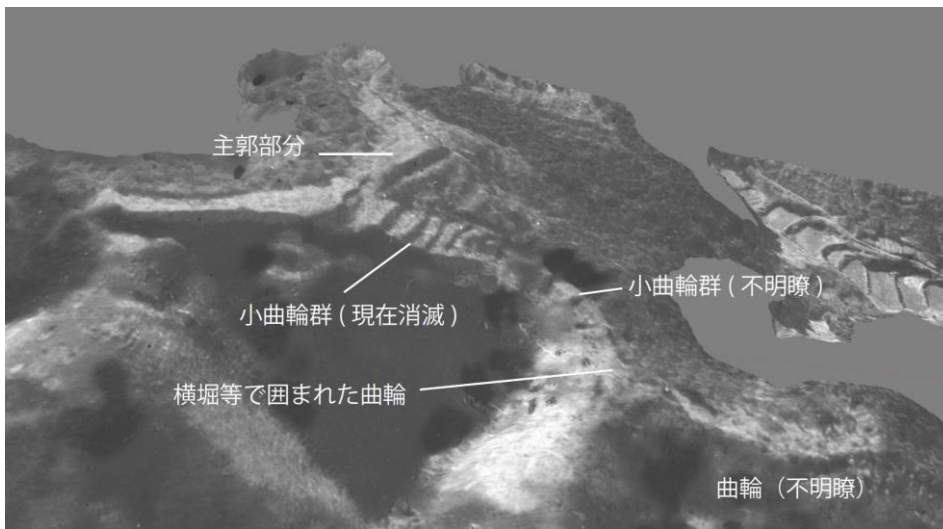


平成4年

高尾城の想定範囲



高尾城空中写真(昭和31年)



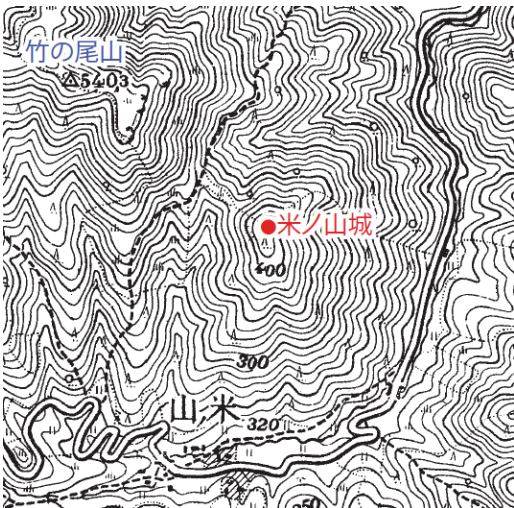
SfM-MVS 技術による三次元立体画像化した高尾城

あらためて構造を見ると幸府側(岩屋城側)に横堀ラインを巡らしている
→岩屋城を攻める恰好

(5)米ノ山城と米ノ山合戦 高橋紹運の実像が見え隠れする戦い



米ノ山城遠景（左：在りし日・右：2013年3月5日（消滅直前・岡寺撮影））



米ノ山城古絵図と位置図



米ノ山城を巡る周辺城郭位置図（岡寺 2024）

【米ノ山合戦を巡る2側面の史料】

①高木長門入道に宛てた立花統虎（宗茂）と戸次道雪の連署状

追而、前刻至米山秋月より忍を入、焼崩候而、即時二秋月衆二千計罷出、彼山可取誘覚悟與依見候、紹運公従山之手被懸付防戦候、未之下列、紹運公自身二被取鍵被突懸候條、秋月之者とも一鐘も不合逃崩候間、一里追討候て、秋月家中無餘義者共、及七十人被討捕、其外大負被仕付、被得大利候條、先以外聞実儀此事二候、此方者已剋註進到来候間、親類家中之者とも不残指遣し、親子之事ハ、北目 卒度無心元事候條、当城 相加候、此方衆二ハ森下中務少輔、今程宇美村 致在郷候間、彼之方角之もの共相進、二三百程能比二懸付候條、少、致分捕候由二候、其外衆ハ合戦終て被懸付之由申候、遠方之義二候間、濶量之前二候、今日者何れも可打入之由二候、未夕委敷事ハ不相關候、此由宗歴老、紹白も、卒度噂可被申、其方淵底如存知、従其元秋月二懼させられ候様二者、紹運・統虎家中之者共者、曾て不存候、何時も少、罷出候ハ、紹運・統虎両家之者とも、一手宛二而も出可申候、此一戦二者此方者手負二三人有之由二候、一人も戦死之者無之候條、一段珍重候、確と従貴国ハ被御覧捨候間、何様人数不相透内をとの心懸迄二候、必二三日中山東何方なり共、令越山可見合覚悟候、呉、船何とか以才覚、早、帰国肝要候、恐々謹言、

天正十一年

十月三日

名当無之

統虎公・道雪公両御判

上書

「高木長門入道殿

道雪」

②イエズス会書簡

（上略）筑前國において豊後の領するヒマ（寶満）Fima 及び立花 Tachibana の城の守将（高橋紹運と戸次道雪）は、豊後の王に叛いた秋月に対して謀略を用ひ、人を遣はして、秋月は大なる領主である、彼等は多數の敵の間に在つて、二城を守ることができないので、豊後を叛き、かれと合體せんことを希望すると言はせた、この使者はまたこれを信ぜしむるに足る多くの理由を挙げた、五回人を遣はしたが、秋月は少しも聞入れなかつた、最後に第六回目に保證として**秋月が非常に希望した一城**の所領を提供し、その城を焼くにより、火を見て人を遣はしてこれを占領するやう申出た、秋月が怒のためこれを承知したので、彼等は直に財産と人とを城より出し、これに火を掛けた、秋月は城の燃え始むるを見て、これを占領するため千人を遣はしたが、豊後の兵一萬餘は十分の準備をなして待受け居り、彼等を囲んで千人のうち百餘人を殺した、秋月は大いに憤つたが、今復讐をなす途がない、（中略）ほかに尊師に通信すべきこともあるが、ほとんど一般書翰に認めてある故、今この書翰に述べず、尊師が犠牲ならびに祈禱において予を推薦されんことを願ふ、

一五八四年一月二十日（天正 11 年 11 月 18 日）

長崎より、

※米ノ山合戦とは・・・

天正 11 年 10 月 2 日に起こった高橋方と秋月方の戦い。高橋方の出城であった米ノ山城を秋月方の密偵が火を放ち、攻め取ろうとしたが、高橋紹運が即座に駆け付け、秋月方を撃退したというのが、立花・高橋方の文書から読み取れる戦いの推移だったのだが・・・

※イエズス会文書が示す米ノ山城合戦の実態は・・・ ×秋月の策謀 ○高橋方の策謀

※米ノ山城の立地と米ノ山城周辺の秋月方の城の配置

穂波郡に突き出すように位置する高橋方の米ノ山城

それに対し、米ノ山城から東への動きを封じよう、あるいは監視しようという秋月方の小規模砦の数々

「米ノ山城は高橋が秋月の咽喉に突き付けた刃、それを防ごうとする秋月」
→「秋月が非常に希望した一城」とは米ノ山城であり、米ノ山合戦は、秋月方の戦力を少しでも削ごうと、高橋紹運が画策した欺瞞作戦だったのではないかと？

まとめ 大宰府の戦国山城

岩屋城・・・高橋紹運の本拠。文明年間の大内氏により築城。

高橋鑑種段階は、宝満城がメインか？現在残る畝状空堀群などは天正 14 年の岩屋城合戦時の状況を反映。九州北部の国衆レベルの居城としては一般的。

宝満城・・・岩屋城と並ぶ御笠郡おさえの山城。高橋鑑種段階は岩屋城よりこちらがメイン。中心施設は不明ながら現在の東院谷・西院谷・講堂あたりか。山麓の升形城、頭巾山城、有智山城が砦として、中心を守る構造。

高尾城・・・岩屋城に対して防御を固める構造、大宰府の入り口・石坂峠近くに築かれていることから、天正 13 年段階の筑紫氏による改修か翌年の岩屋城合戦に備えた島津（秋月）方の改修か？

米ノ山城・・・穂波郡に飛び出すように築かれた高橋方の出城。背後は宝満山系とつながる。秋月方にとっての「非常に希望した一城」。米ノ山合戦では、高橋方が秋月方を欺いたのが実態に近いだろう。紹運像の実態の一端が垣間見えたか？